秩父市を舞台とする「生涯活躍のまちづくり」について議論する「地方居住を考えるワークショップ」

全国につながる 連携の輪 豊島区

住民協働による「多世代型ＣＣＲＣ」

「消滅可能性都市」――こんなショッキングな見出しがテレビや新聞に踊ったのは、２０１４（平成26）年のことです。その８９６自治体のリストには東京から離れた地方都市だけではなく、豊島区も含まれていました。日本の人口が減少局面に入り、いずれ東京も人口減少の時代を迎えます。全国連携プロジェクトは、東京と地方がウインウインの関係を築くことが大きな命題です。全国どこでも生涯活躍できるまちをつくるにはどうすればいいのか。豊島区の取り組みから探ります。

生涯活躍のまちづくりを目指す

ＣＣＲＣ＝「退職した高齢者が対象」という誤解

「ＣＣＲＣ」という言葉を聞いて、どんなイメージを持つでしょうか。「ＣＣＲＣ」とは「Continuing Care Retirement Community」（継続的なケア付き退職者向けコミュニティー）の略称です。

ＣＣＲＣというと、どうしても「Ｒ」のイメージが強くて、定年退職した高齢者が対象だという先入観が強いと思います。東京は土地が高く、高齢者の介護施設を造るにもお金がかかる。高齢者は、田舎に転居して、東京の特養ホームの待機者を減らす。そんな紋切り型の発想で考えると、いかにも、高齢者を追いやるようなイメージしか思い浮かびません。

元々、姉妹都市関係にあった豊島区と埼玉県秩父（ちちぶ）市は、民間の調査機関から、２０１０年からの30年間で、20～39歳の女性の人口が5割以上減少する「消滅可能性都市」という指摘を受けました。そこで、豊島区は「消滅可能性都市対策本部」を設置し、「地方との共生」を対策の柱の一つに位置付けました。２０１５（平成27）年度には、「消滅可能性都市」から「持続発展都市」を目指し、両区市協働で「日本版ＣＣＲＣ」構想の可能性について模索を始めました。

このような状況の中、事業をス

昨年12月にはグループワークを務めた青木美恵さんから高野之夫区長（左）と秩父市長へ提案書を提出しました

タートしましたが、注目すべき特徴は、両区市長のトップダウンではなく、「住民参加」で検討しているところです。

２０１６（平成28）年7月、公募の豊島区民や秩父市の職員・関係者などが参加するワークショップがスタートしました。公募した38人の区内在住・在学・在勤者には、大学に通う20代の若者から会社を退職した70代の高齢者まで、幅広い世代が揃いました。

ワークショップでは、秩父市の魅力を知るために現地見学ツアーを実施。秩父市の現状や魅力、自然や文化を肌で感じました。その後、五つのチームに分かれて秩父市を舞台とする「生涯活躍のまちづくり」について議論。12月に開かれた第５回ワークショップでは、住民提案による「生涯活躍のまちづくり提案書」を豊島区長と秩父市長に提出し、各チームによる政策提案発表とパネルディスカッションを行いました。

提案書は、①「多世代共生」様々なニーズに合わせた住まい・コミュニティーを形成②秩父＆豊島の「地域資源」を活かした継続的な交流の輪を広げる③秩父だからできる！誰もが活躍できる自己実現のまち――の三つの柱でまとめています。そして、最後に「秩父市と豊島区が共に発展・成長し、共存共栄をはかっていきましょう！それが『日本の元気』にもつながると私たちは確信しています！」と結んでいます。

近距離だからできる二地域居住

興味深いのは、地方移住だけでなく、「二地域居住」を提案している点です。

池袋と秩父は、西武線の特急レッドアロー号で約80分という近距離です。ＣＣＲＣというと、遠い田舎に移住することを想像するかもしれませんが、この距離なら「二地域居住」という選択肢もあります。現在のコミュニティーを捨てきれず、移住にはどうしても不安がつきまとう。そんな人は、豊島区と秩父市の双方に生活の拠点を持って、どちらも「終の棲家」とすることも可能です。グループワークでは、住居型、宿泊施設型などユーザーニーズに合わせた複数の居住スタイルを提案しています。

また、新たなハコモノを建設して、移住者を集めるという発想ではなく、既存の地域資源を活用する考えです。高齢者が地域と隔離された新たな施設に移住するのではなく、空き家など既存のストックを有効活用し、多世代の方々が地域に認められた居住者として住む。そして、秩父市を生涯活躍ができるまちにしていくことがうたわれています。

秩父市と豊島区は１９８３年10月に「姉妹都市」となって以来、双方のイベント参加や住民レベルの交流など、33年以上も様々な形で交流を続けてきました。でも、意外に両自治体の住民はお互いの自治体のことをよく知らない。ワークショップの参加者からはそんな声も聞かれました。『姉妹都市』としての情報発信・ＰＲ強化」も盛り込まれました。

２０１１（平成23）年にテレビ放映され、その後、映画化もされて大ヒットしたアニメ『あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない。』は、秩父が舞台。アニメの聖地として多くのアニメファンが訪れています。一方、池袋にもアニメショップや執事喫茶、コミックショップなどが並び、〝腐女子〟の聖地である〝乙女ロード〟と呼ばれる通りがあります。アニメやコミックなどの共通の文化を通じた交流も可能かもしれません。提案書でも『アニメの聖地』とい

自治体間交流の盛んな区

秩父市との間で住民参加による「多世代型のCCRC」を進める豊島区。実は、これに限らずたくさんの交流自治体との付き合いが盛んな区でもあります。

文京、豊島、北、板橋、練馬の5区で構成する「ビジネスネット」は毎年、幹事区の持ち回りで合同事業を実施しています。2015（平成27）年は豊島区を幹事として「地方創生」をテーマに、一大消費地の池袋を中心に立地する小売・卸売業バイヤーと5区及び交流市町村の企業をマッチングさせる商談会を開催しました。

豊島区と防災協定を結んだ15自治体が集まる「防災サミット」を、27年度、28年度と続けて、開催しました。大規模災害発生時の自治体間の広域連携について考える貴重な機会となっています。

東武鉄道㈱と東武東上線沿線の4自治体（豊島区・川越市・東松山市・寄居町）で構成する東武東上線沿線サミットも有名です。今年は2月に「開運スタンプラリー」を開催しました。もちろん、西武線沿線サミットもあります。豊島区、秩父市、飯能市、西武鉄道㈱の4者による連携で、交流を続けています。

昨年7月に池袋駅周辺で開催された「東京フラフェスタin池袋2016」では、特別区全国連携プロジェクト「地方交流観光物産展」を同時開催しました。

これらの自治体交流の発展は、人口減少と少子高齢化という「消滅可能性都市」からの脱出にとって、大きな鍵を握っているかもしれません。

豊島区と防災協定を結んだ15自治体が集まる「防災サミット」

「東京フラフェスタ in 池袋2016」では「地方交流観光物産展」も同時開催

全国のモデルケースに

秩父市と豊島区は、ワークショップの提案を受け、2017（平成29）年度にお試し居住を実施予定。元気なうちからの移住や二地域居住を考える区民や、その家族の希望に対応していく方針です。また、4月からは両自治体同士の人事交流も始まっています。

区の担当者は「地方移住というと遠い田舎に移り住むイメージがあると思うが、豊島区と秩父市のような近距離型のCCRCは、全国でもめずらしい。秩父市のような地方が元気になることで、豊島区も元気になる。秩父市と豊島区の『多世代共生』の取り組みを全国のモデルケースとして、日本全体の元気につなげていきたい」と意欲を示していました。

住民参加のワークショップで進化し、多世代が様々な形でかかわる秩父市・豊島区『生涯活躍のまちづくり』は、今年度からいよいよ本格的に始動します。

という共通点を活かしたコラボイベントを開催する」という提案がありました。